

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第16号 2012年3月31日 発行

目次

- | | | | |
|--|---|----------------------------|----|
| *シンポジウム「多角的に読む『福翁自伝』」
～2011年11月17日開催～ | 2 | *新収資料紹介 | 8 |
| *門野幾之進記念館リニューアル | 6 | *研究活動ニュース／主な動き | 10 |
| *ワグネル・ソサエティの戦後と私 西川杏太郎 | 7 | *センター諸記録（2011年10月～2012年3月） | 11 |
| | | *スタッフ一覧 | 12 |



* 明治末期の体育会端艇部旗 明治39（1906）年頃 *

古い写真の中に、手に取るようにくっきりと写し出されているものであっても、それをもはや実際に手にすることも目にすることも出来ないのが普通である。自分が写っている写真でさえ、5年も前のものであればそうであるから、明治時代のものであればなおさらだ。

今回発見された体育会端艇部の旗は、長年戸田の艇庫で部員やOB・OGが見慣れていた明治40（1907）年の写真（右）に写っているものが、期せずして出現したものだった。写真の中では、感謝状の額を中央に、7人の部員が月桂樹で飾られたペンマーク、中心に「槽」と刺繍されたこの旗を掲げている。

大きさは110×145センチ。裏面には「1906. DEC.」の日付と「C」という字のある小布が縫い付けられており、何らかの競技会の勝者が、毎年同様の布を貼り足していく予定であったと推定されるが、実際は1枚しか貼られていない。長野県内の塾員宅で発見され、昨年12月、三田漕艇倶楽部（端艇部の三田会）を通じて当センターに寄贈された。

明治期の塾生活動を今日に伝える貴重なモノ資料として、大切に伝えていきたい。（都倉）

松沢弘陽氏基調講演 「『福翁自伝』校注をめぐる」

「福翁自伝」を収める『新日本古典文学大系明治編 福沢諭吉集』（岩波書店）の校注者・松沢弘陽氏に、校注をめぐるどのようなことを考えたかについて、基調講演をして頂いた。以下はその要旨を文責者（都倉）が再構成したものである。

（１）『自伝』に注釈を付す前提

１．本書は「文学」としてこのシリーズに加えられたので、『自伝』はそもそも文学かという問題が生じる。日本では、文学史上の自伝の存在が等閑にされがちだが、フランスの文学研究者 P. Leuqueune『自伝契約』での自伝文学の定義に『自伝』を文学として見る手掛かりを得た。特に自伝作者にとっての「真実」は、客観的な「事実」とは違うという議論は、大きな示唆を与えてくれた。

２．『自伝』は口述筆記草稿に加筆して完成した。ここに福沢の積極的な意図を見出すべきではないか。話し言葉を選択し、全体の構想に基づいて物語を構成していった過程から何が見えてくるかを考えた。

３．「古典へ注釈を付す」ものとして念頭にあった本は、Pleiade 版のルソー『告白』（本文 650p、注 388p）である。日本の先行業績としては『日本古典文学大系 日本書紀』が念頭にあり、内容面は河北展生・佐志伝編『「福翁自伝」の研究』が前提となった。

４．注釈を付すのは研究ではなく、問題の入口を示すにとどまる。分析、評価には踏み込まない枠内で、注の有無の選択という潜在的な形で学問研究上の関心を生かしたいと考えた。

（２）『自伝』の読み方 コンテキストとテキスト

１．『自伝』の context（歴史的背景）を理解するために＜中心と周縁＞という観点が極めて有効である。これには二つの視点があり、周縁にいる者こそ、中心を含めた世界全体をより深く理解でき、新しい文化を創造し得るとして、周縁の利点、特権性を強調する視点。もう一つは、中心によって周縁が疎外され収奪される（marginalize）という視点。中津における福沢家、大坂における適塾、さらに適塾の中での福沢、幕府官僚制内での翻訳方の位置など、福沢の生涯には自覚的・無自覚的に周縁に立つ局面が多く、それが福沢の視点に強い影響を与えていると考えられる。

２．『自伝』を通して幕末の社会変容について見てみると、幕政改革・藩政改革と人材登用によって起こった社会的上昇気流に、福沢が巧みに乗って新しい世界に乗り出したと理解できる。また私塾における学問の学習方法の変容一日田の咸宜園を源泉とし適塾へも繋がる—なども考察する材料がある。

３．福沢は政治過程における「情報」の意味についてよく理解していた。彼は幕末諸藩のスパイの情報収集に深く関与していたことが、宮地正人氏の研究と『自伝』の記述を合わせ検討することで浮かび上がる。

４．prosopography を念頭に付けた注がある。これはある集団のメンバーの経歴を組み合わせることで、時代の変動を探る手法であるが、福沢が有名無名にかかわらず人名を列挙している箇所（遣欧使節団メンバーなど）は、この観点で意味があると考え、すべての個人に注を付した。それらの人々から、前述の幕末の社会的上昇気流の動向や、幕府倒壊後の出処進退も追うことが可能となる。

５．テキストの読み方として、相互テキスト性（intertextuality）に着目した。あるテキストに、それに先行する他者や自分の書いたテキストが入り込むという問題で、例えば『自伝』に福沢の観劇の漢詩が出てくるが、これは『史記』列伝の故事を踏まえている。それを知れば福沢の、福沢ゆえの孤独と悲哀を読み取れる。力のある読者にはわかる仕掛けではないか。同様の仕掛けは少なくない。

６．テキストの「空白」への着目は、福沢が言及しなかった事柄を見ることで、何を取り上げたかったかという『自伝』の主題を裏側から証明することになる。例えば「慶応 2 年」の記述が飛んでいる。この時期に「長州再征に関する意見書」を提出したという自分の政治関与を封印していると読める。明治 14 年の政変も不自然に簡略だ。これらの空白を埋めると、福沢の context が見えるので、短い記述にも時に厚い注釈が必要と考えた。

７．福沢にとって「死」の問題は重要である。東西を問わず戦闘者（騎士・武士）にとって不徳とされる死への恐れが、『自伝』では、暗殺との関係で憚らず公言される。これをどう捉えるか。また Carmen Blacker が依拠する、Carl Becker の 18 世紀啓蒙思想家についての議論で、「the uses of posterity」（後世の有用性）の心境が指摘される。同時代に容れられずキリスト教も否定する啓蒙思想家が、死後の生を信じるキリスト教を変容して、後世には必ず理解されるという心境を得たという議論で、福沢にもそれに通じる考えがあったのではないか。後世への期待が、一種の遺言としての『福翁自伝』の背景にあったと考える。

８．近年は福沢の脱中心化が盛んであるが、今後文学理論を活用して『自伝』のより深い分析を行い、また福沢と同時代人の自伝的記述を比較し、『自伝』の位置も見定めていきたい。（文責：都倉武之）

『福翁自伝』におけるオーラリティと多声性

一橋大学大学院社会学研究科 小 林 多寿子

社会学的なオーラルヒストリー研究をおこなってきた観点からみると、『福翁自伝』は、日本において最初に「自伝」という言葉が使われた近代的自伝の端緒というだけでなく、オーラルヒストリー作品としても出発点に位置づけられる。『福翁自伝』はその冒頭に石河幹明が記しているとおり、「速記者に口授して筆記せしめ 自ら校正を加え福翁自伝と題し」たものである。福沢諭吉が速記者・矢野由次郎を前に口頭で語り、矢野が書き起こした原稿に福沢が加筆修正している。速記者とICレコーダーという記録媒体の違いはあるものの、現代のオーラルヒストリーの作品化と同じプロセスを経ている作品である。口述の語り、速記原稿、浄写本、さらに新聞版、書籍版という作品化のプロセスのなかで『福翁自伝』の複数のヴァージョンが生みだされている。オーラルな語りからリテラルなテキストへの変換のなかでいくつものヴァージョンが生成されている重層性はオーラルヒストリー作品ならではの特徴であろう。

最新の書籍版である松沢弘陽校注『福沢諭吉集』（岩波書店、2011）の『福翁自伝』をオーラルヒストリー作品としてとくに二つの点に着目しながら読んでみた。一つは語りの場である。語り手・福沢が聞き手・矢野を前に語ったという＜語るコンテキスト＞の存在といってもいい。1897年10月頃から翌98年5月まで1カ月4回程度、1回4時間くらい、単純計算でも約120時間におよぶ口述の語りの場があった。＜語るコンテキスト＞は、書籍版においても聞き手・矢野が浮上するところにみいだされる。たとえばサンフランシスコで少女と写った写真を示すところ（140頁）、あるいは『西航手帳』を示すところ（154頁）である。速記者矢野は、福沢が写真や手帳をとりだして聞き手・矢野に示しながら語る場面を本文のなかで（ ）に入れて描いている。ここにはオーラルな語りの場がたしかにあったことが現われている。

いま一つはテキストのなかのオーラリティに注目したい。つまり『福翁自伝』はもともと口頭で語られたというオーラリティを包含している。音声録音技術の開発される以前なので口述の語りこそ再生できないものの、速記録にもとづいた口述校訂原稿は残っているという。佐志傳が「口述校訂原稿の数量的分析」によってあきらかにした速記者原稿率44.35%という数値は『福翁自伝』のオーラリティを示す値として興味深い（佐志傳2006『『福翁自伝』の数量的分析表』『『福翁自傳』の研究 本文編』301頁）。『福翁自伝』の約4割以上の部分は福沢が語りの場でオーラルに語ったままの言葉なのである。

『福翁自伝』のオーラリティは多様な＜声＞が含まれている多声性という特徴へつながる。『福翁自伝』を読むと、じつにさまざまな人びとの＜声＞が聞こえてくる。会話する＜声＞がある。伝聞による＜声＞もある。これらの＜声＞は、片カギカッコのついた発話として描かれる直接話法と、たとえば「と云う」という言葉で締めくくられる間接話法、これらの話法が駆使された多彩な声の重なりとして描かれている。佐志傳の分析によると、『福翁自伝』における福沢の加筆率は55.30%である。その加筆部分にもさまざまな声を書きこまれている箇所がいくつもある。

『福翁自伝』から聞こえてくるのは誰の＜声＞であろうか。＜声＞の主体の観点から分析することもできるだろう。重要な他者としての家族の声は案外すくない。父の声は伝聞として間接話法で2回でてくる。母の声は直接話法で5回、間接話法で3回、計8回聞こえてくる。妻の声は間接話法で1回のみである。重要な他者としてのメンターの声では、たとえば緒方洪庵の声は直接話法で3回描かれている。身近な他者としての友人の声、所属集団のなかでの他者の声、名前のある他者の声、名前のない他者の声、多様な声が重なる。そのなかでもっとも聞こえてくるのは福沢自身の＜声＞である。福沢の＜声＞には、独り言のように語る独白の声と他者と対話する声という二種類の声がある。とりわけ直接話法で他者と対話する自己の声を福沢は描いている。『福翁自伝』の多声性はさまざまな＜声＞の主体と福沢との関係性を浮かび上がらせる。

『福翁自伝』の明解さは平易なわかりやすい文章にあるといわれる。「福沢全集緒言」で福沢は、わかりやすく表わすことを緒方洪庵の教えと蓮如の影響によるものと述べている。だが、明治期のいまだ文語体優勢であった時代における口語体表現によるわかりやすさは、福沢の書く力もさることながら、口述の語りをもとにしたオーラルヒストリー作品であることに拠っているとおもう。そのわかりやすさは語られる場面の臨場感が伝わってくるところにもあるだろう。とりわけ福沢をめぐる人びとの多くの＜声＞が聞こえてくるという多声性は、語りの場で福沢は「生きられた経験」をオーラルに語ったのだ、福沢の想起する人びとの声は福沢の声によって表出されたのだという確からしさを感じさせる支えとなっている。

松沢弘陽校注の深度

立教大学教授 松 田 宏一郎

ただいまご紹介にあずかりました立教大学の松田と申します。先ほども言及がありましたが、松沢先生を松沢さんと呼ぶ機会が訪れようとは思っていなかったのですが、先ほど控室で松沢さんから直接そのようなお話がありましたので、今日だけは失礼して、この機会を利用させていただこうと思います。

今日のシンポジウムの企画は、「多角的に読む『福翁自伝』」というタイトルになっていますが、長年この分野で常に先頭を走ってこられた松沢さんの最新の『福翁自伝』注釈を読みながらということなので、松沢さんを通じて多角的に読む『福翁自伝』と考えました。

松沢さんが切り開かれた思想作品解説の方法論は深く多様ですが、その中で私にとって非常に重要だったのは、福沢の用いる概念を、丁寧に、しかも印象論で語るのではなく、テキストに即して、またそこに引用されていたり、密かに埋め込まれた他のテキストを確認しながら読んでいくという手法です。

例えば『福翁自伝』の冒頭に出てくる「社中」という、慶應義塾にとって非常に重要な概念です。最初に3ページのところに出てきて、次に149ページのところにもう一回出てきます。見事だと思うのは、149ページのところの社中に付いている注は、イギリスの、いわば政府の方針に合わないことを主張した自発的な結社が具体的に参照されていることを突き止め、つまり「社中」というのは、そういう自発的結社という意識に基づいているのだということをテキスト的に裏づけをされたところなんです。あるいは『鄙事多能』（44頁）についても、『論語』を引かれて、単に福沢が自分は器用なのだとすることを自慢しているというのではなく、『論語』のある種の優れた徳のある人間にとって何が重要なことかということを喚起するイメージではないかということを論じているところは、松沢さんが福沢の性質のどういったところに着目しているのかをよく示しています。さらに、「本心」（65頁および補注17）、「俯仰天地」（69頁）といった概念について、『孟子』に典拠があることに言及されていて、そこから同様の福沢のイメージが浮かび上がります。この点は後ほど説明します。

本日、ぜひ松沢さんに教えていただきたいのは、「競争」という概念です。『福翁自伝』の中で、「競争」というのが訳語として幕府の上役に許されなくて、しぶしぶ取り下げたという話は非常に有名です（補注79）。松沢さんはもちろん、『莊子』が指摘する人間の行為の一つ、「競あり争ある」というところに一つの典拠がありうると、ここは自分の解釈をあまり強く入れずに書かれています。

ところが、徳川時代にも「競争」や、それに近い言葉を見つけることができます。これは松沢さんが気づかなかったのではなく、福沢と徳川思想の一部の潮流が安易に結びつけられてしまうと思って外したのではないかと思います。例えば太宰春台という荻生徂徠の弟子に

あたる学者は、『聖学問答』の中で、「およそ天下の人争競の心なき者あらず」といっています。また、懷徳堂の学者である中井履軒が『老子雕題』（『老子』に付けたコメント）の中で、老子の言う道というのは雌の道である。これは雄の道、雄道に対して消極的で、攻撃的でない態度だ。その得るところ「競争」なし、と述べています。競争のない状態にしようとする、結局のところは「心を私とする」、つまり自己の内面についての関心が、「公」よりも上に立ってしまう。非常に狭い世界で消極的で心情的なことだけを重視するようになり、本来社会全体の問題である道徳的な関心が出てこないのではないかという批判をしています。

なぜこんなところにこだわったかといいますと、福沢の「競争」観には、やや意味合いのことなる関心が混じり合っているように思われます。つまり福沢は、「開国」という国際化の課題が突きつけられている時に競争しなくてどうするのですかと言っているようなところと、中井履軒が既に提起していたような問題、つまりもう少し深いレベルで、競争することが自分の近視眼的な感情や利害関心を抑制し、社会的にコミュニケーションする手段なのだと訴えるところがあるのではないかと思います。

松沢さんの注釈は、どちらかというと、福沢の主張の中に、自己の欲望を自分でコントロールすること、特に、自分の利益についての狭い関心というか、自分の利益だけを極大化したいという気持ちを自分でコントロールすることを非常に重視している点に、強く関心があるのではないかと思います。そしてその読みはこの「競争」についても可能かと思っています。

一部の読者は、福沢は自由競争派なのか、それとも道徳派なのかと、イメージが分裂しているかもしれません。そこで福沢の「競争」観の重層性について、もしよろしければうかがってみたいと思います。私の推測では、丸山真男の福沢論は、どちらかというと、自由競争型であることのフレッシュさを若干強めに言ったところがあるとすると、松沢さんは、自分の先生である丸山真男の読みに対し、違うように読める可能性がありますよと、言ってみせたのではないかと感じました。先ほども触れたように、たとえば「本心」とか、「俯仰天地」という、自分の欲望を抑えて、本来の自分が目指すもの、いわば克己する、おのれの欲望を乗り越えていく、またどこに出ても、天を仰いでも、地に伏しても、恥じることは全くないような精神態度に着目し、『論語』や『孟子』や、さらに朱子の注との関連（補注17）に言及している点に、松沢さんの読みの主張が隠されているのではないかと感じました。

松沢さんのテキスト解釈は、細かなところまで、日本政治思想史を研究する人間にとっていつも深さを感じさせるものです。その一端をお話することで報告とさせていただきます。ありがとうございました。

「正直な自伝」から「主張する自伝」へ

慶應義塾福沢研究センター准教授 都 倉 武 之

私は松沢氏の『福沢諭吉集』によって、『福翁自伝』のイメージや位置づけがどう変わるのかということについて考えてみたい。

従来の自伝のイメージは、福沢が欠点や失敗を正直に語り、その語り口や生き方は前向きで明るいというもので、「カラリとした」「颯々」といったキーワードで、ポジティブでオープンな自伝のイメージが形成されてきた。

ところが今回の松沢氏の本では、この自伝を「閉ざされた小社会の中の孤立した自我が独立に向かって自己形成する物語」とし、福沢は事実の客観的な正確さには実は関心が薄く、独立という主題に向かって選択された逸話を収斂していく強い意思があると指摘する。さらにそこに、明るさではなく「死」への意識があり、「一身の生をこえて『独立の手本を示』し続けようとしたのではないか」とする。「自己形成の物語」と「死」への意識という2つの指摘を私なりに敷衍してみたい。

自伝の記述と事実がかなり異なっていることについては、近年さかんに論じられている。いくつか例を挙げれば、まず中津に対して激しい憎悪をあらわにする記述の一方で、「人誰か故郷を思はざらん」（「中津留別之書」）と記したように、中津への深い愛情を示す事実が少なくないこと。自伝最大のヒーロー・奥平菫岐は、実は福沢に多くの転機を与え、世話をした人物であること。『時事新報』の経営は放任主義で一切関与していないという記述を、自筆の帳簿が否定していること。日清戦争勝利の喜びを「愉快ともありがたいとも言いようがない」と書く一方で、実は福沢が戦勝後の日本社会の実情に不満を募らせ、時事新報社説では「寧ろ戦勝を後悔する」（M30.6.30）とさえ書いている事実があること。

以上はただ数例に過ぎず、エピソードは自伝の全般にわたって福沢の味付けで操作されていると考えられるが、そのことは次のように読み解けるのではないか。例えば中津は「打破すべき封建社会」の象徴、奥平菫岐は「憎むべき門閥制度」の象徴として批難される。『時事新報』については、独立不羈を掲げる同社の「将来にわたる経営の自立」の強調が意図され、日清戦争の勝利は「儒教主義」との戦いという意味で福沢の生涯と重なる。このような案配で「独立の手本」としての自分の生涯を描く文脈に添って、大胆・自在にエピソードのアクセントを使い分けたということである。正直な自伝ではなく、実は積極的に主張している自伝であり、それは自らの死後、『自伝』だけを読む読者を意識した結果なのではないか。

このことを別の観点から検証してみたい。66年の福沢の生涯の活動には、社会との二種類の対話法が存在したと私は考える。一つは言葉。著作や時事新報社説で、文字を通して世の中に訴える。今ひとつは「躬行実践」によって世の中に訴える手法。信ずることを口で言うだけでなく自ら行って見せることで、社会を改良するという発想が福沢には常にある。一例として福沢の生涯において「門閥制度の打破」を意図した実践がその「服装」にあったことを紹介してみたい。

明治期の学生は、袴を着けるのが一般的だったが、福沢は、袴を武士出身であることを誇る服装とみて自覚的に避け、慶應義塾では袴を着けず町人風に着流しで過ごすことを良しとしていた。士農工商の工商と同様の服装を自ら身につけることで、社会の随所に門閥や権威の意識が残っていることを意識させ、それを変えていく必要性を塾生に自覚させたのである。『時事新報』に「学生の袴は廃すべし」という社説も載っている（M26.10.22）。諸学校の写真や回想を丹念に調べると、義塾の服装の特異性やその自覚が浮き彫りとなる。

「実践」への関心は、福沢の生涯の随所に見られ、それは言葉以上に重視されていたと私は考えるが、一方でそれは歴史に残りにくいし、同時代の人にしかニュアンスが伝わらない。言葉と実践の両者そろったところに「独立の手本」としての福沢生前の活動があったが、自伝では、実践を世に示すことが出来ない死後が意識されている。

そこで、服装を通して福沢が取り組んでいた門閥の問題は、自伝においては奥平菫岐のエピソードとなり、「門閥制度は親の敵でござる」という父の無念を語った有名なくだりをはじめ、中津藩中で不快な思いを重ねたエピソードとして多様に語られる。実践を伴わない「独立の手本」を後世に残していくために逸話の選択・強調がなされ、主張する強い言葉が織り込まれたと考えられないだろうか。私はそこに、将来の読者まで独立に導くという福沢の強い意志を読み取りたい。松沢氏が指摘する刊行当時の読者との一定の距離感は、将来にわたって長くこのメッセージを生きたものたらしめようという意欲に由来する抽象性のようなものではないか。

そのように考えると、幕末維新が遠い絵巻物の世界になり、生活スタイルなども激的に変わってしまった今日こそ、福沢の想定した後世であり、教育者、啓蒙思想家としての福沢が残した自伝の真価を問える時代になったのではないだろうか。

門野幾之進記念館リニューアル報告

「ボーイ教師」の再評価をめざして

福沢門下の教育者・実業家として知られる門野幾之進（1856-1938）の記念館が、昨年末、27年ぶりに全面リニューアルされた。この記念館は、1984年に千代田生命保険相互会社が主体となって三重県鳥羽市の生家跡に開館したものだったが、同社の業務は現在ではジブラルタ生命に引き継がれており、展示内容も古さが否めない状態となっていた。幾之進の孫にあたる進一氏が3000点以上の資料を鳥羽市に寄贈されたのを機に、幾之進を記念する「靄溪奨学会」によってリニューアルが企画され、鈴木隆敏氏（本塾大学院文学研究科アートマネジメント分野講師）と筆者が主にその実務にあたり、当センターも全面協力したので、ここにそのあらましを報告したい。

今回の企画は、鳥羽の子供たちに幾之進を身近に感じてもらい、自分も頑張ろうという高い志をもってもらうことに主眼を置いた。しかし、幾之進の生涯は、従来千代田生命を中心に語られていたので、今日では非常に説明しにくくなっている（そもそも記念館は、千代田生命鳥羽支社に併設される形で開館した）。そこで焦点を絞ったのは、幼少期からの学問に対する情熱と、自分の立場から——最初は教育者として、次いで保険業によって——社会に積極的に関わり、それをより良くしようと尽力した姿勢の部分である。

具体的には、展示の章立てと展示資料を挙げながら紹介してみよう。

- 第1章 生い立ち 西洋の学問に関心があり、幕末の藩の危機を積極的に救った父の影響で、学問に目覚め、13歳で東京に出発するまでの幼少期を紹介する。上京時の帯刀、到着直後の写真などを展示。
- 第2章 慶應義塾の「ボーイ教師」 大人に混じって勉強し、14歳で「ボーイ教師」とあだ名される教師として英語や倫理学などを担当、やがて義塾教頭となった教員時代を紹介。展示品は当時の成績表、幾之進手沢のアダム・スミス『国富論』など。
- 第3章 福沢諭吉のもとで 幾之進の生涯を決定づけた福沢との出会いと影響を紹介。福沢の書幅「伯夷其心而柳下惠其行」、福沢書簡、義塾大学部改良のために渡欧した際の日記などを展示。
- 第4章 千代田生命の創立 人々が合理的に助け合う仕組みとして保険業の普及に尽力し発展させた功績を紹介。生命保険を紹介する福沢著『西洋旅案内』、社内に掲げられた幾之進書「源泉混々」、創業日誌など。
- 第5章 晩年 「憲政の神様」と呼ばれた二人の教え子尾崎行雄と犬養毅などとの幅広い交遊と『時事新報』、交詢社への貢献などを紹介。時事新報漫画記者北沢楽天から贈られた色紙、御木本幸吉からの弔電、亡くなる直前に使っていた碁盤などを展示。
- 第6章 郷里への想い 郷里の発展を願い続けた幾之進を記念する靄溪奨学会の活動、弟重九郎の業績などを展示。

リニューアルを記念するセレモニーは、昨年11月28日に行われ、慶應義塾を代表して長谷山彰常任理事も出席して祝辞を述べた。また、全15ページの子ども向け無料冊子『ボーイ教師といわれた鳥羽の賢人—門野幾之進物語—』は、鈴木氏の熱心な尽力によりオープンに間に合わせる事ができた。

筆者は、資料の所在調査と選択、キャプション作成、資料展示など、全般にわたって携わりながら、幾之進の地味だが実直な生き様に徐々に引き込まれていった。幾之進は、素直に福沢を支えたというより、物申して対立することもあるといった、一癖ある人だったようだ。一方で、長年教育現場の先頭に立ち、多くの塾生・塾員が「先生」と呼ばずにはいられない先輩として、時代が昭和に至っても尊敬を集めた。保険業への転身も、教育とは異なった観点からの社会貢献が意図されていた。一人一人がそれぞれの立場で切磋琢磨するところに国の独立も文明もあるとする、福沢の文明観を真の意味でよく理解し、実践に徹した生涯だったといえるのではないだろうか。

なかなか訪れる機会はないと思うが、近隣にお出掛けの際は是非足を運んで頂ければ幸いである。（都倉武之 記）



教師となった頃の幾之進



楽天画「門野先生寿喜の夜に
犬養先生とキスの図」(1932年)

門野幾之進記念館 開館時間 午前9時～午後4時（年末年始休館・入場無料）
〒517-0011 三重県鳥羽市鳥羽1-10-48 TEL 0599-25-7411
JR・近鉄鳥羽駅より徒歩5分（鳥羽市歴史文化ガイドセンター2階）

ワグネル・ソサイエティーの戦後と私 西川 杏太郎

私はいま83歳。昭和20年（1945）春、旧制東京中学4年修了で、塾の旧制大学文学部予科1年に入学しました。東京は3月と4月に巨大な空襲を受け、中学は全焼したので、卒業式はなし。塾の予科も、たしか入学式はなかったと記憶します。当時、予科のキャンパスがあった日吉は帝国海軍に接收され、連合艦隊総司令部となっていて、校舎の一部だけ塾が使えるようになっていたと記憶します。授業はまだ始まらず、教室に山積みになっていた図書の包を解き、整理するのが最初の授業？で、9月からは板橋にあった帝国陸軍の造兵廠へ学徒動員されることになっていました。そして8月15日の正午。日吉キャンパスの広場で、白一色に盛装した海軍の将校や水兵さんたちの見事な整列の片隅に、きたないカーキ色のさまざまな出身中学時代の制服のまゝの私たち塾生も並び、“終戦の詔勅”を聴きました。雲一つない晴れ渡った夏の一日。これでもう空襲はなくなると痛感したものです。

そして9月。まだ授業どころではありません。帝国海軍と交替して、こんどは進駐軍（米占領軍のこと）に日吉キャンパスは接收され、米第八軍の占領基地となったのです。

その秋、私たちは三田の山へ呼ばれました。あの図書館は空襲で屋根が落ち、大ホールは文字通り瓦礫の山。そこに弯曲した鉄骨が何本か横たわる有様で、焼け残った校舎のうち、塾監局の最上階の教室にあつまり、授業らしいものが始まりました。

その頃、三田の山にも進駐軍の兵士が小人数駐留していました。演説館の玄関先に、ワグネルオーケストラの打楽器ティムパニーが革をはがれ、巨大な銅鍋のように置かれ、そこにアメリカタバコの吸い殻が山となっていました。演説館の中では、吹奏楽器のトロンボーンが、ペシャンコにつぶされ、壁に釘ではりつけになっていて、それを先輩とはがしたのも悲しい思い出です。これらは米兵の仕業だと思います。

そんな三田の山での一日。私はすばらしい男声合唱のハーモニーに魅せられ、その場ですぐに合唱団への入部を申込み、大歓迎されました。これが私とワグネルのはじまりです。

一方、学徒動員で戦場に狩り出されていた先輩たちが、つぎつぎと復員（もと海軍や陸軍の将校、下士官たちです）復学して、ただちにワグネルに戻ってこられました。こうしてワグネル・ソサイエティーが復活したのです。中には復員して戻ったけど、復学はしないで、ワグネルで歌うことだけを楽しみに三田の山に日参していた元塾生先輩も混じっていたようです。

先輩も私たちも、一体となって熱のこもった練習が続き、昭和21年（1946）12月23日、念願のワグネル・ソサイエティー第71回、復活定期演奏会が行われたのです。場所はなんと丸の内の帝国劇場でした。大学予科2年生とはいえ早生れの私は当時まだ十七歳の子供。前年までの悲惨な東京での大空襲体験から考えて、なんと平和なこと。忘れることの出来ない感動の一夜でした。この帝劇の二階ロビーでは、当日塾員のご家族によるお見合いも行われていたことを後からきかされました。

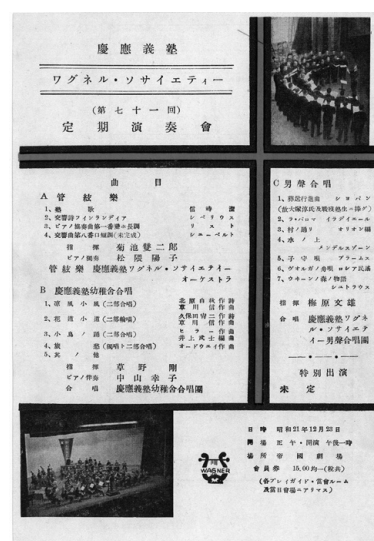
現在の諸兄には、こんな状況、想像もつかないのではないのでしょうか。

ワグネルは復活したけれど、三田の山はまだ焼け跡が残り、日吉は進駐軍専用。予科の授業など満足に出来る訳ではありません。そのため三田の山を下りて三の橋を渡った横町にあった夜間の学校、中央労働学園の校舎を昼間だけ借りて、そこが私たちの校舎となりました。窓ガラスは穴だらけで暖房は無し。冬は外套を着たまゝ、凍える手でノートをとりました。一方ワグネルの練習は、三田山上に残った校舎の階段踊り場などの空間を使って行われたり、あるいは先輩のお宅を拝借という有様でした。

昭和22年、山の下に中等部が開設され、そのあたらしい木造校舎を練習用に拝借することが出来ました。ワグネルのオーケストラと男声合唱の音色は、中等部生にも好評だったようです。当時、中等部の音楽教師であった若き作曲家、芥川也寸志先生や、同じく音校（芸大）出の音楽家、志賀朝子、小川京子両先生も我々の練習をのぞきに見えていました。

こうして私のワグネル生活は、旧制大学最後の卒業となる昭和25年（1950）9月まで続いたのです。しかしその後もしばらくはO.Bとして三田の練習にもよく参加していました。その頃発足したワグネル女声合唱団の初代指揮者には私が就任し、当時の女子学生の蚊の鳴くような、しかし礼儀正しい“小笠原流発声”に閉口させられたのも遠い昔の思い出となりました。

今回、塾の史料として差上げたワグネル・ソサイエティーの各種印刷物のうち、昭和21年以降のものは、すべて私が関係し、自宅に保存しておいたものです。そして昭和14年から18年までの3点は入部して間もなく先輩から頂いたものです。あの大戦末期。塾生もみな“学徒出陣壮行！…”の名のもと戦場に狩り出された頃の重要な史料ではないかと、大切に保存しておいたものです。



第71回 定期演奏会パンフレット



第73回 ワグネル・ソサイエティー定期演奏会
昭和23年3月30日 於：日比谷公会堂

新収資料紹介

平成23年9月から平成24年2月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料の主なものを紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきましたが、すべての資料をご紹介することができず、申し訳ありません。

(物故者敬称略)

福沢諭吉関係資料

■ 初代堀越角次郎墓誌 明治19(1886)年4月 1幅

【堀越 毅一氏寄贈】

堀越角次郎は、上野国碓氷郡藤塚村(現群馬県高崎市藤塚町)の農民田島安兵衛の次男として生まれ、旧名は安平。10代20代を無頼の徒として過ごし、家を追われて江戸に出て公事師や古着などを商って生計をたてていたとき、同郷で旧知の堀越文右衛門(マル文)と江戸橋で邂逅し、その支援を得て、天保14(1843)年に日本橋本船町に反物店を開き、以後堀越角次郎を名乗った。その後店を通旅籠町に移し、開港後は横浜に支店を設けて、織物の輸入取引を行い、巨万の富を築いた。国内の政治情勢から、貿易で富を築いた堀越は攘夷浪人たちの標的にもなったが、剛毅な人柄で脅しに屈することはなかった。洋学者と交流し、彼らの資金を預かって利殖を図り、その生計を助けたと言われている。福沢も大変信頼を寄せ、1000両以上を預けていた。隠居後も横浜正金銀行の設立に寄与している。明治18(1885)年8月25日歿。

福沢による墓誌は、すでに昭和46(1971)年に刊行された『福沢諭吉全集』第19巻(岩波書店)に収録されているが、今回いただいた資料とはかなりの異同がある。特に最後に130字ほどで堀越の投機取引に対する否定的な考えを述べた部分は、全集収録分には含まれていない。

■ 福沢諭吉署名入りたらい(玩具)

明治13(1880)年9月5日購入 1点

【中上川マリ氏寄贈】

福沢諭吉の四女たき(滝)の旧蔵品。福沢自筆で「明治十三年九月五日東京竜ノ口勸工場ニ於テ之ヲ求 福沢阿滝」と書かれている。三女しゅん(俊)も同文が書かれた同様のものを所蔵していた。勸工場は、多くの商店が集まり商品を陳列して販売した建物で、人々が集まり賑やかであった。「竜ノ口」は、和田倉御門あたりの俗称。竜の口と呼ばれる石製の吐水口があったことから、付近一帯の地名となった。現丸の内1丁目内。明治13年9月は、明治6年8月4日生まれの俊は満7歳、9年3月2日生まれの滝は満4歳で、福沢は好奇心旺盛な年頃の2人を連れ、人形遊びに使うような大きさのたらいを買い与えたのであろう。



■ 福沢家家紋入り筆筒 1棹

【中上川マリ氏寄贈】



福沢家では、丸に向かい鷹の羽(紋帳によっては丸に抱き鷹の羽)、重ね紅葉(同じく杏葉楓)、割り紅葉の三種類の家紋が使われた。定紋は丸に向かい鷹の羽であったが、福沢諭吉がこの紋は女性に向かないからと割り紅葉を使用するようになったといわれている。筆筒は、各段中央に大きな割り紅葉の紋がつき、明治27(1894)年に滝が志立鉄次郎と結婚する際、持参したものとされている。同様の筆筒が、俊が明治26年に清岡邦之助と結婚する際に持参したものと、清岡家にも残されていた。

■ 志立たき(滝)ミニチュアコレクション 26点

【中上川マリ氏寄贈】

滝が蒐集した茶道具や裁縫道具などのミニチュア。孫(二女の娘)である中上川マリ氏に譲られた。滝自筆の説明書がついているものもある。

志立は、阪急東宝グループの創始者小林一三によれば、「小肥りで、血色のよい発刺たる洋装の女性」で、明治20~30年代の慶應義塾の学生にとって憧れの的であった。大正年間には新しい女性の生活や生き方について『新女界』などに寄稿し、東京基督教女子青年会の創立に関わり、大正7(1918)年から昭和17(1942)年まで、その会長も務めた。晩年には、徳川無声や丸山真男と対談し父について語っている。昭和45年3月5日に亡くなった。

■ 福沢ふさ(房)日本画(雛図) 1幅

【中上川マリ氏寄贈】

志立滝の旧蔵品。福沢の二女房は日本画を嗜み、雪香の号で多くの作品を残している。この作品は内裏雛が描かれていることから、3月3日生まれのマリ氏に譲られたもの。

福沢諭吉門下生・慶應義塾関係資料

■ 吉田賢輔関係資料 4点

【購入】

吉田賢輔は天保8（1837）年に、江戸下谷の幕府御徒の家に生まれた。名は彦信、号は竹里。万延元（1860）年に古賀茶溪に抜擢されて、幕府蕃書調所で蘭英書の翻訳に従事し、文久2（1862）年には外国奉行支配書物方、さらに御徒目付となった。福沢諭吉とは洋学を介して親しくなったと思われ、福沢が慶応3（1867）年に渡米した折に記した日記にも登場する。明治初年には一橋家に仕え、また慶應義塾でも教鞭を執った。明治2（1869）年には、福沢が前々年に出版した『西洋旅案内』を補うものとして、実用会話なども収めた『西洋旅案内』外編を慶應義塾から出版している。3年には尺振八、須藤時一郎らと共立学舎を設立、7年からは大蔵省紙幣寮で紙幣史の編纂を担当し、全23冊に及ぶ『大日本貨幣史』（1876～1883）を完成させた。26年10月19日歿。

1) 小幡篤次郎・小幡甚三郎纂輯『英文熟語集』 慶応4（1868）年3月 1冊

編纂者の小幡篤次郎・甚三郎は、中津出身で、元治元（1864）年に福沢諭吉の依頼を受けて兄弟で上京、以後福沢の側にあつて生涯慶應義塾の運営に尽力した。『英文熟語集』は、兄弟が英語を学ぶ過程で書き留めておいたものを整理して出版したといわれている。この吉田旧蔵本には、多くの書き込みがある。吉田は、小幡甚三郎が明治3（1870）年に出版した、欧米の学校制度を紹介する『西洋学校軌範』で校正を担当している。

2) 「改正増補 物理訓蒙」清書原稿および版權関係資料 1冊および1綴

共立学舎創立後は、英学を教えるとともに翻訳書を出版、明治5年から7年には大蔵省翻訳局に出仕した。

3) 『新編 小学修身書』巻一～四および出版版權関係資料 明治19（1886）年5月 3冊および4点

明治15年から18年までは、『日本教育史資料』（明治23～25年刊行）の編纂に加わっていた。付属資料は、『新編小学修身書』編纂主意書（1冊）と出版版權願（3枚）。

4) 「瘠我慢の説」写本

福沢が旧幕臣である勝海舟、榎本武揚の出处進退を批判する「瘠我慢の説」を執筆した折、勝、榎本の他には木村芥舟、栗本鋤雲らとともに、吉田にも送ったといわれている。

■ 森田思軒宛徳富蘇峰書簡 明治24（1891）年11月30日付

【購入】

宛先の森田思軒（文蔵）は、文久元（1861）年備中国小田郡笠岡村（岡山県笠岡市）に生まれ、明治7（1874）年5月大坂慶應義塾に入学、分校の移転に伴い徳島に移るが、校長矢野文雄が東京に戻るのに従って9年4月本塾に移り、10年ごろまで在籍した。その後帰郷して興譲館で学んだが、15年矢野の招きで報知社に入り、18年から19年にかけて清国・ヨーロッパを訪問し、各地から通信や翻訳作品を『郵便報知新聞』に送った。25年には国会新聞社、29年には万朝報に入り、また『探偵ユーベル』（ビクトル・ユーゴ）『十五少年』（ジュール・ヴェルヌ）『イタリアの囚人』（チャールズ・ディケンズ）などの翻訳で文学史上にも名を残している。明治30年11月歿。

差出人の徳富蘇峰は、文久3（1863）年に熊本藩郷土の子として肥後国上益城郡津森村（熊本県上益城郡益城町）に生まれ、熊本洋学校や同志社英学校に学び、故郷で学校経営を行った後上京、明治20（1887）年民友社を設立し『国民之友』を創刊、また23年には『国民新聞』を創刊した。『国民之友』ではしばしば福沢諭吉を論じ、教育者として高く評価する一方で、その政治意識は、平穩をよしとして官民調和を唱える「進歩の敵」「主義の敵」とであると批判した。福沢をヴォルテールやフランクリンに比し、敵に誤解され味方に理解されえないとも嘆いている。

書簡の内容は、先に森田より「迷惑之筋」についての書簡があり、それに対して、この1カ月間病気のため日本語の新聞を読むことを禁じられていた（特に国民新聞は神経を刺激するので厳禁とある）ことを述べ、明日は警察に全快届を出し出社する予定であることや、森田の報知社改革に人を介して愚意を伝えるので、森田の意見を聞きたい旨などを述べている。

■ 幸田成友「日欧通交史」他講義受講ノート 昭和12（1937）年ごろ 6冊

【山田多知見氏寄贈】

幸田成友は露伴の弟。明治29（1896）年帝国大学文科大学史学科卒業。明治43年に慶應義塾大学部文学部講師に就任し、国史などを担当、昭和15（1940）年文学部教授となった。

ノートの筆者は百姓一揆の研究で有名な林基（元専修大学教授 故人）と推測される。林は昭和15年慶應義塾大学文学部国史学科卒。在学中から幸田に師事していた。これらのノートは、林から同じく百姓一揆の研究で知られる山田忠雄（元東海大学教授 故人）が譲り受けたもの。

■ 藤林敬三資料の寄贈

戦後復興期の昭和26年から28年に経済学部長を務めた藤林敬三（1900-62）の旧蔵資料が次男茂夫氏より寄贈された。藤林は大正15年経済学部卒、ドイツ留学を経て昭和9年より同学部教授となり、社会政策を専攻。戦後の労働立法の審議に参加し、中央労働委員会会長時代、三井三池争議の調停に当たったことでも知られる。義塾産業研究所初代所長を務め、旧蔵書は同研究所に藤林文庫として保管されている。今回の寄贈も産研を通じたもので、手帳やメモ類、写真などおよそ100点である。

■ 卒業アルバム関係写真の寄贈

三田の学生が組織する卒業アルバム委員会から、卒業アルバム制作のために撮影された写真類が一括寄贈された。1970年代半ばから80年代のもので、段ボールにして10数箱に及ぶ量である。90年代のものは近年の整理により欠けている。また2000年代のものはデジタルデータが残っており、その後さらに発見された1960代の写真とともに、追加寄贈される予定となっている。今後、日吉で整理作業が進められる。

■ 講演会の開催

10月29日（土）14時から16時まで、三田演説館において、客員所員の松沢弘陽氏（前国際基督教大学教授、北海道大学名誉教授）による『『福翁自伝』を読み直す—私にとっての福沢諭吉—』と題する講演会を実施した。この講演会は、社団法人・福沢諭吉協会と共催で行われた。他の団体との共催は、初めての試みであったが、演説館がほぼ満員となる100名以上の参加者があり、盛況であった。

■ シンポジウムの開催

11月17日（木）13時から16時まで三田キャンパスの北館ホールにおいてシンポジウム「多角的に読む『福翁自伝』」を開催した。松沢弘陽氏に基調講演をお願いし、その後、小林多寿子氏（一橋大学教授）、松田宏一郎氏（立教大学教授）、都倉武之君（慶應義塾福沢研究センター准教授）の3人のパネリストによりそれぞれの視点から『福翁自伝』の読み方について提案があった。討論は、主に松沢氏がパネリストの質問に答える形で進められたが、フロアーからの発言も多く、時間をオーバーするほど、熱心な議論がなされた。平日にも拘わらず、100名以上の参加者があり、たいへん有意義なシンポジウムとなった。（本号2～5ページ参照）

■ ゲスナー賞の受賞

センターが編集作業の中心を担った『未来をひらく福澤諭吉展』図録が第6回ゲスナー賞「目録・索引」部門で銀賞を受賞した。授賞式は10月28日に明治大学で開催された。

■ 阿部家資料の展示

12月3日（土）に慶應義塾と三田文学会共催で朗読劇『銀座復興』が北館ホールで上演されたが、その原作者である水上瀧太郎の資料を含めた阿部家資料の展示を同ホール前のスペースで行った。3月にご遺族より阿部泰蔵とその長男・水上瀧太郎の資料が福沢研究センターに寄贈され、阿部家と縁戚関係にある小泉家資料とともに、整理・保存をすることになり、その作業を進めているが、今回はその一部を展示したものである。

■ 大阪での福沢研究センター講座

今年度も秋学期に大阪リバーサイドキャンパスにおいて、福沢研究センター講座が開催されたが、今回はこれまでのオムニバスの講座とは異なり、客員所員である安西敏三甲南大学教授による4回の連続講座『『文明論の概略』を読む』を実施した。9月18日から12月17日まで、月に1回2時間の講義で、毎回約50名の参加者があり、受講生にも好評であった。

■ 『慶應義塾150年史資料集』進捗状況

昨年度までに別巻の刊行が終わり、いよいよ『慶應義塾150年史資料集』本編の刊行となるが、現在、第1期全4巻の編集を同時並行で進めている。特に、第1巻の「塾員塾生資料集成」は、編集の最終段階にあり、2月8、9日には専任所員と調査員によって1泊2日の合宿が行われ、入稿原稿の最終的なチェックを集中的に行った。第1巻の刊行は、予定よりもやや遅れて2012年の夏となる予定である。

■ 諸会議

- *『慶應義塾150年史資料集』(以下資料集) 編集委員会 (10月4日)
- *『近代日本研究』第28巻編集会議 (10月5日)
- *平成23年度第2回運営委員会 (11月14日)
- *平成23年度第2回センター会議 (12月14日)
- *管理職全体会議 (1月13日)
- *小泉基金運営委員会 (1月24日)
- *資料集第1巻合宿 (2月8日～9日) クロスウェーブ 東中野
- *資料集第3巻編集委員会 (2月13日、3月23日)
- *『近代日本研究』第29巻編集会議 (3月5日)
- *平成23年度第3回運営委員会 (3月14日)
- *ワークショップ (近世近代研究交流会と合同開催) 「近世近代の国際関係と日本」 (3月24日)

■ 人事

- 〈専任所員〉
- 昇任 大学准教授 都倉 武之君 10月1日～
- 〈事務局〉
- 退職 事務嘱託 山本真由美君 ～ 3月31日
- 非常勤嘱託 山根 秋乃君 ～ 3月31日

■ 主な来往

- *中津藩士子孫 桑名昭治氏来訪 (10月22日)
- *適塾記念センター江口太郎所長、廣川和花氏来訪 (11月8日)
- *山崎元名誉教授、三田漕艇倶楽部岡崎洪太郎氏来訪 (11月9日)
- *塾員門野進一氏ご夫妻来訪 (11月11日)
- *岡毅一郎氏、資料返却および貸与のため来訪 (11月28日)
- *ベトナムよりファンティトゥジャン氏来訪 (12月14日)
- *小幡篤次郎子孫 堀昭一氏来訪 (1月11日)
- *白杵市教育委員会岡村一幸氏、資料閲覧のため来訪 (1月16日)
- *港区郷土資料館松本健氏、小沢絵理子氏来訪 (1月18日)
- *愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 馬場毅氏、大学史担当 佃隆一郎氏来訪 (1月19日)
- *日本民藝館理事石丸重尚氏、学芸部長杉山享司氏来訪 (1月27日)
- *成蹊学園史料館保延有美氏、山川晴美氏、資料閲覧 (2月3日)
- *中津教育委員会吉川和彦氏、福沢旧邸保存会浅原由紀子氏来訪 (3月26日～27日)
- *塾員清浦奎明氏ほか2名、来訪 (3月27日)

■ 出張・見学

- *清野係主任、全国大学史資料協議会2011年度総会・全国研究会に参加のため伊勢皇學館大学 (10月5日～7日)
- *都倉准教授、塾員 佐々木正五氏に真珠湾攻撃参加体験等の聞き取り調査 (10月18日)
- *都倉准教授、吉岡研究嘱託、中村調査員、横山調査員、資料調査のため長野県安曇野市の上原家 (10月21日～24日)
- *酒井事務長、ゲスナー賞授賞式に参加のため明治大学 (10月28日)
- *西沢教授、福沢旧邸保存会の評議員会出席のため中津 (11月15日)
- *都倉准教授、「子供たちに愛されたアメリカ人形展」内覧会にて挨拶のため銀座ミキモトホール (11月16日)

- *都倉准教授、横山調査員、門野記念館リニューアル作業のため鳥羽 (11月25日～28日)
- *米山所長、西沢教授、設置講座受講生とともに明治学院大学を見学 (11月30日)
- *米山所長、第50回福沢諭吉記念祭全国高等学校弁論大会記念式典にて講演、同大会にて審査員のため中津 (12月7日～8日)
- *小室教授 (所員)、都倉准教授、酒井事務長、教材作成のため中津において福沢関連史跡の撮影 (2月2日～4日)
- *西沢教授、都倉准教授、堀調査員、埼玉県小川町の田端家を訪問 (3月2日、26日)
- *都倉准教授、本田直左衛門親英氏の遺族から日吉台地下壕の話聞き取り (3月8日)
- *都倉准教授、横山調査員、柏崎の吉田家を訪問し、資料調査 (3月9日～11日)
- *米山所長、西沢教授、福沢旧邸保存会の理事会、評議員会に出席のため中津 (3月21日)

■ 講師派遣

- *都倉准教授、福沢諭吉記念文明塾で「慶應社中の形成」と題して講義 (10月27日)
- *都倉准教授、日本法政学会にて「福沢諭吉と災害復旧支援」と題して報告 (11月20日)
- *西沢教授、埼玉慶友会にて「福沢理念を現代にどう活かすか」と題して講演 (11月27日)
- *西沢教授、石坂巖ゼミ OBOG 会にて「福沢諭吉の女性論」と題して講演 (12月3日)
- *西沢教授、SFC 中高の学部説明会で三田の歴史解説 (12月9日)
- *西沢教授、船橋市男女共同参画センターにて「福沢諭吉から学ぶ男女共同参画」と題して講演 (12月13日)
- *都倉准教授、世田谷市民大学にて「福沢諭吉の戦略的思考」と題して講義 (1月26日)
- *西沢教授、中部大学・名古屋大学共催シンポジウム「林金兵衛とその時代」にパネリストとして出席 (1月28日)
- *米山所長、東京三田倶楽部で「慶應義塾廃塾の危機と福沢諭吉」と題して講演 (1月30日)
- *小室教授 (所員)、福沢諭吉先生112回忌法要時記念講演会で「現在の経済情勢と福沢諭吉」と題して講演 (2月3日)
- *都倉准教授、アートセンター主催のシンポジウム「震災復興と学校建築」にて「慶應義塾と関東大震災」と題して講演 (2月5日)
- *西沢教授、国分寺三田会にて「福沢諭吉における一身独立」と題して講演 (2月26日)
- *西沢教授、『三田評論』座談会に出席 (3月6日)
- *西沢教授、世田谷市民大学にて「福沢諭吉の女性論・家族論とその現代的意義」と題して講義 (3月29日)

■ その他

- *図書館旧館展示室の天井修繕工事 (11月29日～12月16日)
- *朗読劇「銀座復興」に合わせ、北館ホール前にて阿部家資料の展示 (12月3日)
- *第177回福沢先生誕生記念会に伴い、寄贈資料等を展示 (入場者約100名) (1月10日)
- *星出宇宙飛行士が船内に持ち込む記念品の候補 (福沢の書) を広報室経由で JAXA に届ける (2月21日)
- *三田および寺田倉庫から日吉西別館に資料を移送 (3月1日、7日)

スタッフ一覧

所 長 米山 光儀 教職課程センター教授
 副 所 長 岩谷 十郎 法学部教授
 平野 隆 商学部教授
 専任所員 西沢 直子 福沢研究センター教授
 都倉 武之 福沢研究センター准教授
 所 員 池田 幸弘 経済学部教授
 (兼運営委員) 梅垣 理郎 総合政策学部教授
 小野 修三 商学部教授
 小室 正紀 経済学部教授
 沢田 達男 理工学部教授
 樽井 正義 文学部教授
 林 温 同
 山内 慶太 看護医療学部教授
 所 員 有末 賢 法学部教授
 井奥 成彦 文学部教授
 牛島 利明 商学部教授
 大久保忠宗 普通部教諭
 太田 昭子 法学部教授
 大塚 彰 志木高等学校教諭
 小川原正道 法学部准教授
 加藤 三明 幼稚舎長
 斎藤 暁子 女子高等学校教諭
 末木 孝典 高等学校教諭
 Ballhatchet, Helen 経済学部教授
 宮内 環 経済学部准教授

顧 問 岩崎 弘 元幼稚舎教諭
 河北 展生 名誉教授
 小泉 仰 同
 坂井 達朗 同
 佐志 傳 元高等学校教諭
 寺崎 修 名誉教授
 中村 勝己 同
 松崎 欣一 名誉教諭

客員所員 安西 敏三 甲南大学教授
 飯田 泰三 島根県立大学副学長
 井田 進也 大妻女子大学名誉教授
 區 建英 新潟国際情報大学教授

掛川トミ子 関西大学名誉教授
 片岡 豊 白鷗大学教授
 我部 政男 山梨学院大学教授
 川崎 勝 武蔵野大学客員教授
 佐藤 正幸 山梨大学教授
 白井 堯子 千葉県立衛生短期大学名誉教授
 進藤 咲子 東京女子大学名誉教授
 曾野 洋 四天王寺大学教授
 高木 不二 大妻女子大学短期大学部教授
 西田 毅 同志社大学名誉教授
 浜野 潔 関西大学教授
 平石 直昭 帝京大学教授
 平山 洋 静岡県立大学助教
 藤原 亮一 田園調布学園大学教授
 前坊 洋
 松沢 弘陽
 松田宏一郎 立教大学教授
 宮村 治雄 成蹊大学教授
 森川 英正
 山田 央子 青山学院大学教授
 林 宗元 韓国関東大学校教授
 Craig, Albert ハーバード大学名誉教授
 Saucier, Marion フランス国立東洋言語文化大学教授
 Nguyen thi Hanh Thuc

研究嘱託 田中 康雄
 金 眞瑠
 巫 碧秀
 三島 憲之
 石井寿美世
 吉岡 拓

事 務 局 酒井 明夫 事務長
 清野 早苗 係主任
 山本真由美 嘱 託
 高嶋 朱里 同
 印東 史子 派遣職員
 山根 秋乃 非常勤嘱託
 柄越 祥子 同

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、16名
 (3月31日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第16号

Newsletter of
 Fukuzawa Memorial Center for
 Modern Japanese Studies,
 Keio University

発行日 2012年3月31日 (年2回刊)
 編 集 慶應義塾福沢研究センター
 発 行
 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
 電 話 03-5427-1603
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
 印 刷 (有) 梅沢印刷所